

【報告】

A 大学看護学生に対する慢性看護学実習における患者のセルフ
マネジメント支援のための対話学修の取り組みと課題

大山 末美 天野 薫 兼子 夏奈子 河野 貴大
長山 有香理 山崎 淑恵 本田 彰子

聖隷クリストファー大学看護学部

Approaches and Challenges of Dialogue Learning to Improve
Patients' Self-Management Skills in Chronic Nursing Practice
for Undergraduate Nursing Students from University A

Suemi Oyama, Kaoru Amano, Kanako Kaneko, Takahiro Kono
Yukari Nagayama, Yoshie Yamasaki, Akiko Honda

School of Nursing, Seirei Christopher University

《抄録》

慢性疾患は、患者自身が疾患の急性増悪を起こさないようにコントロールすることが重要であるため、看護師が行うセルフマネジメント支援の重要性は大きい。しかし、看護学生にとって、患者のセルフマネジメント力向上の支援をするために、患者と向き合い患者の体験を知るための対話を行うことは難しい。そこで、A大学慢性看護学領域では、慢性疾患を有する人のセルフマネジメント力向上の支援をするために、シナリオを用いた対話学修を学内実習として導入した。

学生は、本学内実習での患者役体験から、看護師の問いかけ方で患者に生じる感情が異なることに気づき、自身のコミュニケーションが患者の体験を知るための対話となっていたか考察を深めることができていた。学生からは、ディスカッション時間の延長を希望する意見があった。今後の課題は、学生の思考がより深まるようにディスカッションの時間配分をはじめ本学内実習全体の構成を検討することである。

《キーワード》

対話学修、セルフマネジメント、慢性看護学、看護学生

I. はじめに

慢性疾患は身体や臓器の不可逆的な変化により治癒が望めないことが多く、疾患の急性増悪を起こさないように症状や日常生活などをコントロールする必要がある。そのため、慢性疾患を有する人と家族（以下、患者）に対して看護師が行うセルフケア支援の重要性は大きい。慢性疾患の治療の基本は、患者本人が主体的にその病状を生涯継続して自己管理していくことである。そのため患者は、症状のモニタリングをはじめ、医療機器の使用法、低下または喪失した機能を補足する食事や運動などの療養法といった複雑かつ多岐にわたる知識と技術を身につけ、生涯にわたって継続的に自己管理をすることとなる。このような自己管理のことをセルフマネジメントとよんでいる。

松繁（2017）は「セルフマネジメントは、健康問題をかかえている個人が、医療専門家と協働して計画された活動を意図的に実行するプロセスである」と述べている。看護師が患者のセルフマネジメント力を向上する支援をするためには、患者と向き合い、健康に関する価値観、生活習慣、今までの成功体験や時には人生について対話を通じて患者を知ることが必要となる。セルフマネジメント力を向上するためには患者が自ら治療に参加し自身の症状や日常生活のマネジメントをすることが必要となる。そのためには患者の病の体験を探ることが必要となる（孫，2020）。患者の病の体験を理解しようとする関心を向けることで、健康に関する価値観、生活習慣、今までの成功体験を引き出すことができ、患者と共に必要なセルフマネジメントを見出す糸口となる。

しかし、看護学生（以下、学生）には、看護師がどのように思考し患者と意図的に対話を行っているのかイメージすることは難しい。特に臨地看護学実習時では、慢性疾患を有す

る受け持ち患者に対し、患者の病気の体験や今までの健康に関するその人の体験に関心をもって聴くということよりも、学生が患者に聞きたいことを「質問」することのみになっていることが多い。

そこで、A大学の慢性看護学臨地実習（以下、慢性看護学実習）では、慢性疾患を有する人のセルフマネジメント力を支援するために必要な対話学修を行う学内実習（以下、本学内実習）を導入した。本報告では、その取り組みのプロセスと学生の気づきや感想から、より効果的な対話学修ができる学内実習を構築するための課題を検討する。

なお、本報告における対話学修の内容は、事例における患者の疾患や症状、生活状況から必要なセルフマネジメントをアセスメントし、患者の強みを見出すことを患者のもとに訪れる前に行うことを前提にし、事例の状況において看護師と患者のやり取りから、患者に生じる思いを知り、患者が「自分の病気の経験を知ってもらえた・聞いてもらえた」「自分の努力を認めてもらえた」という体験をするには看護師がどのように関わればよいか考察できるところまでとする。

II. 倫理的配慮

対象となる学生には、本学内実習における学生の気づきや感想を報告すること、その際個人が特定される記述をしないこと、成績には関係しないことを説明し、同意を得た。

III. A大学慢性看護学臨地実習の概要

慢性看護学実習では、新型コロナウイルス感染症拡大予防のために臨地における実習期間の短縮が必要となった。慢性看護学実習目標を達成するための学修内容は、文部科学省、厚生労働省（2020）からの通達に示されている「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う

医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」に従い、臨地実習に加えて学内実習として臨床推論能力の養成や模擬実習を計画した。具体的には、事例を用いた臨床推論能力の養成と意図的・系統的な患者観察を実践的に行う学内実習を行い、その後、臨地で1～2名の患者を受け持ち、先述した学内実習での学修を活かした看護過程の展開に基づく臨地での実習を行い、さらに、事例を用いたフィジカルアセスメント、輸液管理に関する学内実習および文献を用いた慢性疾患を有する人に対する看護の振り返りとした。

慢性看護学実習目標は下記の5つであり、本学内実習は「4) 病をもって生活する患者と家族が、自立した生活を送るための支援を理解し、看護を実践できる。」の一部を達成する。

- 1) 慢性疾患が患者と家族の生活に与える影響を、身体的、心理的、社会的側面から総合的に捉えることができる。
- 2) 慢性疾患の特徴を理解し、長期的視点で必要な看護を理解できる。
- 3) 病をもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、看護過程を展開できる。
- 4) 病をもって生活する患者と家族が、自立した生活を送るための支援を理解し、看護を実践できる。
- 5) 慢性疾患看護の看護実践を通して、病をもって生活することに対する看護者としての考えを深める。

慢性看護学実習では、2021年度から実習目標の4)をより充実させるために本学内実習を導入した。なお、本学内実習も含め慢性看護学実習における学内実習は臨地で遭遇する患者の状態や状況を事例として提示し、看護を考えるシミュレーション教育を中心とし、学生は自身の考えを相手に伝わるように伝えること、他者の意見をよく聴くことを意識し

ながら行う事前学修に基づく学生の同士のディスカッションによる学び合いを多く取り入れ展開している。

IV. 本学内実習の教育方略

本学内実習の目標は以下の4点とした。

- 1) 疾患や症状、生活状況から患者に必要なセルフマネジメントを臨床推論できる。
- 2) 必要なセルフマネジメントを行うために、ストレングスモデルの考え方を活かして患者の強みを意識した患者のとらえ方がわかる。
- 3) セルフマネジメント力を高める支援の一つである対話の基本的な考え方を考察できる。
- 4) 患者役・看護師役・観察役それぞれの視点から、看護師と患者の対話場面で患者の体験を考え、対話方法を検討することができる。

本学内実習を実施する時期は病棟での臨地実習が終了した翌週月曜日に設定した。2021年度に慢性看護学実習を履修する学生は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い臨地での看護学実習で受け持ち患者とかわる機会が減少している。そのため、本学内実習の学修効果を高めるために、患者を実際に受け持たせていただき、臨地での実習で様々な体験を経た後に本学内実習を行うこととした。

次に学生がセルフマネジメント支援を行うために対話する思考プロセスを学ぶこと、学生同士で考えた対話を受けて患者はどのような体験をしたのか患者視点で感じたことを共有することで、対話について考察することができるようにする教育方略を考えた。

1. セルフマネジメント支援に関連する学修レディネスを活かす

慢性疾患を有する人をとらえるための基礎的知識として、2年次開講の必修科目である

成人看護援助論Ⅰ（科目概要：成人看護学の療養上の課題に対する看護支援、及び看護技術に関する基盤となる知識を学修する）では、セルフマネジメントの概念、セルフマネジメント力を高める支援、および成人教育学の考え方を学んでいる。ここでは、成人期にある対象のセルフマネジメント力向上の支援のために必要なセルフマネジメントの構成要素、自己効力感および成人教育学の考え方である対象者の経験を活かすことを学修している。

また、3年次開講の必修科目である成人看護援助論Ⅲ（慢性疾患を有する人と家族の看護）では、患者の強みに焦点を当てその人ととらえるストレングスモデル、対話するためのコミュニケーション技術であるコンコーダンスの考え方を学んでいる。同時に学生は、患者本人でさえも強みと気づいていないことを患者へ言語化してフィードバックする承認の技術演習を学修している。

2. 能動的な学修スタイルにする

本学内実習の教育方略として、学生が能動的に学修できるようシミュレーション教育の一連の流れを取り入れ、看護師のかかわりにより患者が体験していることを感じとることを中核とするため看護師・患者・観察者役を決定し、割り当てられた役割を演じることができるようロールプレイを行うこととした。

3. 対話によって生じる患者体験を学ぶ仕組みをつくる

対話を学ぶためには、看護師と患者とのやり取りの中で患者が体験していることを知ることが重要である。そのために本学内実習では、患者役・観察役ともに看護師とのやり取りの中で生じる患者の感情に着目するようにした。つまり、「自分の病気の経験を知ってもらえた・聞いてもらえた」「自分の努力を認めってもらえた」などに焦点化した患者の体験を知り、そこから対話とは何かを考えるこ

とに着目できるようにした。

そのために、1回目のロールプレイでは患者役を教員が行い、学生同士で考えた対話内容を受けて感じた体験を教員が学生伝え、見本を示すように設計した。

4. 難易度を上げながら繰り返す

学生が少しずつ複雑化したことに挑戦できるよう2つのステップを作成した。

1つ目のステップは患者の体験を聴くことができる対話を考えることを課題とし、2つ目のステップは1つ目のステップを活かしながら、患者の症状を確認しつつ対話することを考え実施できるようにした。

5. 安心して意見が言える学修環境

学生それぞれが看護師役として考えてきた対話を実践し、意見を出し合う方法では、学生は他学生の意見を聴き学ぶことができる一方、看護師役として考えてきたことが他の学生の考え方と違っていたらどうしようと不安を抱き、ロールプレイが円滑に進まない場合もある。看護師役を実施した学生の考えを否定していることととらえることもあり、意見を述べることを躊躇することもある。

そこで本学内実習では、対話をどのように進めていくかを事前課題に基づきグループで検討し、グループで考え出したことを実践することにした。このようにすることで、看護師役を実施する学生、意見を述べる学生共に心理的負担が緩和されると考えた。

6. 患者の状態や状況のイメージ化を助ける教材作成

学生が患者の状態や状況をイメージできるように、シナリオと患者が自身のことを語るDVDをA大学慢性看護学領域教員が作成した。DVDの患者役は教員が病衣や酸素チューブなどを装着し、現在の症状がどの程度でどのような対話が可能か考えることを促すもの

とした。

7. 教員間のファシリテーションの質の担保

本学内実習は学生同士のディスカッションの活性化をはかるため、少人数グループでの実施が適切であると考えた。よって、学生4～5名を1グループとし、各グループに教員1名を配置して行うこととした。

本学内実習では、1名の教員が1グループを担当し数回のセッションのファシリテーションを行う。本学内実習担当者は、ファシリテーターとなる教員間で指導内容に大きな差が生じないように指導案を作成した。指導案には、セッション中の教員の教育活動や本学内実習の目標に対して学生がどの程度ディスカッションができればよいのか目安となるものを記載した。また、指導案には、どのポイントでどのような発問をするのかなども記載し、本学内実習の目標が達成できるように説明を行い、教員間の共通理解が得られるようにした。

V. 本学内実習の実際

シミュレーション教育の一連の流れとして阿部（2018）は、事前学修、ブリーフィングセッション（導入）、シミュレーションセッション、デブリーフィングセッション（振り返り）、評価・まとめを示している。本学内実習においては、ブリーフィングセッションでミニレクチャーを行うことにした。ミニレクチャーは15分程度とし、2年次、3年次で履修したIV. 1. の内容を想起できる内容とした。学生に提示した事例1と2をシナリオシートとして図1に、本学内実習全体の流れは、図2に示す。

セルフマネジメント支援を行うための思考プロセスとして、患者の病状、状況アセスメント、患者自身が関心を寄せている事柄とその理由を知ることが不可欠となる。そこで事

前課題として、両事例の疾患の病態、検査データ、治療などから患者の身体的側面のアセスメント、社会的背景から社会的側面のアセスメント、DVDから現在患者が考えていることを情報提供し、必要なセルフマネジメントを導くことを提示した。加えて、学生が実施する患者役、観察者役、看護師役の着目ポイントを本学内実習の目標から焦点化することを提示した。

ブリーフィングセッションで行ったミニレクチャーでは、2、3年次の講義で使用したスライド資料を用い、ストレングスモデル、コンコーダンス、対話と会話の違いを再度説明した。本学内実習がスムーズに進むように、事前課題について数人の学生にプレゼンテーションをしてもらい、患者のアセスメント、アセスメントから導いたセルフマネジメントがどのようなものになったかそれぞれの学生が確認したうえで、再度、本学内実習の目標を確認するようにした。

ロールプレイは、臨地実習の病棟ごとに4～5人のグループに分かれて行った。1週目から同じ顔ぶれのグループで学修を進めているため、ディスカッションは活発であった。学びが深まるように学びのシェアリングは、他病棟グループも交えて行うように設定した。

本学内実習における事例1での学生の気づきは、患者が話していることが患者にとって気になっていること、患者に関心を持つためには患者の話したことや返答に対して共感することが必要であること、患者に対して実施して欲しいことや指導しなければという思いが強いと患者の発言を聞き流してしまうこと、などがあった。

事例2では、患者に顕著な症状があるシナリオ設定とした。学生の気づきは、症状による苦痛に対する看護師の声掛けがないと自分の苦痛を気にしてもらっていない・わかってもらえていない気持ちになること、今まで頑張ってきたことを具体的に話したいからそれ

シナリオシート

あなたは本日勤務でAさん、Bさんの担当です。

Aさん、Bさんと本日初めてお会いします。Aさん、Bさんの疾患や今後の治療方針が以下のように申し送られました。病状が安定してきたので自宅で病状のコントロールを行うためにセルフマネジメント能力を高める支援が必要だと看護方針が決まりました。

本日、バイタルサインも病状も安定しています。

<事例Aさん>

Aさんは55歳の主婦です。夫（55歳会社員）と息子（28歳会社員）と同居している。50歳の時に2型糖尿病と診断されメトホルミン塩酸塩 250mg 1錠を朝夕内服することでHbA1cを8%程度で維持できていましたがこの数か月で10%に上昇したため入院することになりました。本人は食事や運動について気を付けていたとのことでした。入院時の身長は158.5cm、体重79.5kg、HbA1c10%、随時血糖値283mg/dlでした。

入院後インスリン療法を導入し糖毒性が解除され、食前血糖値110~130mg/dlに安定し、またインスリン分泌機能は保たれていました。今後の治療方針は、経口血糖降下薬、食事療法、運動療法となっています。

<DVD>

S：糖尿病って初めて言われたときはびっくりして食事のことや体を動かすことは気にしてたけど、薬も飲んでるし5年悪くもならなかったから。

ここ1年くらい夕食後の間食が多かったわ。だから太っちゃって。夫も息子も私が間食していると「糖尿病が悪くなるぞー」とか「お母さん間食多すぎ」とか言っていたわ。

私も痩せたいと思って夫と一緒に退院後にウォーキングをする約束をしたのよ。

<事例Bさん>

Bさんは60歳の女性で、夫（65歳）、娘夫婦とみかんを作っている農家です。5年前、階段昇降や坂道歩行で息切れを自覚し受診しCOPDと診断されました。肺炎を起こしCOPDが悪化したため今回の入院となりました。入院して1週間、酸素療法、抗菌薬治療で酸素化は改善し現在経鼻酸素療法（1.5l/分）で安静時SpO₂は96~97%です。

入院前息切れを感じていたので、畑仕事の合間に休憩を取り入れて呼吸状態が落ち着いたら次の作業へ進むなど工夫していたとのことでした。

<DVD>

S：いや今回は初めて本当に息が苦しかったのよ。

畑仕事とうまく調整しながらやってたんだけどね。

図1. シナリオシート

を聴くような問いかけをして欲しいこと、自分の頑張ってきたことや実施してきたことを看護師の言葉でまとめられると自分を理解してもらえていないという気持ちになったこと、などがあった。

学生の感想としては、本学内実習を病棟での臨地実習の後ですること、学生自身が患者と対話したことを一度踏みとどまって振り

返ることができたこと、患者の気持ちに焦点化して考えることができたこと、看護師のかかわりが患者にとってどんな体験か客観的に考えることができたこと、などがあった。また、学生同士でもっとディスカッションし、患者との対話方法を考えたいという意見もあった。

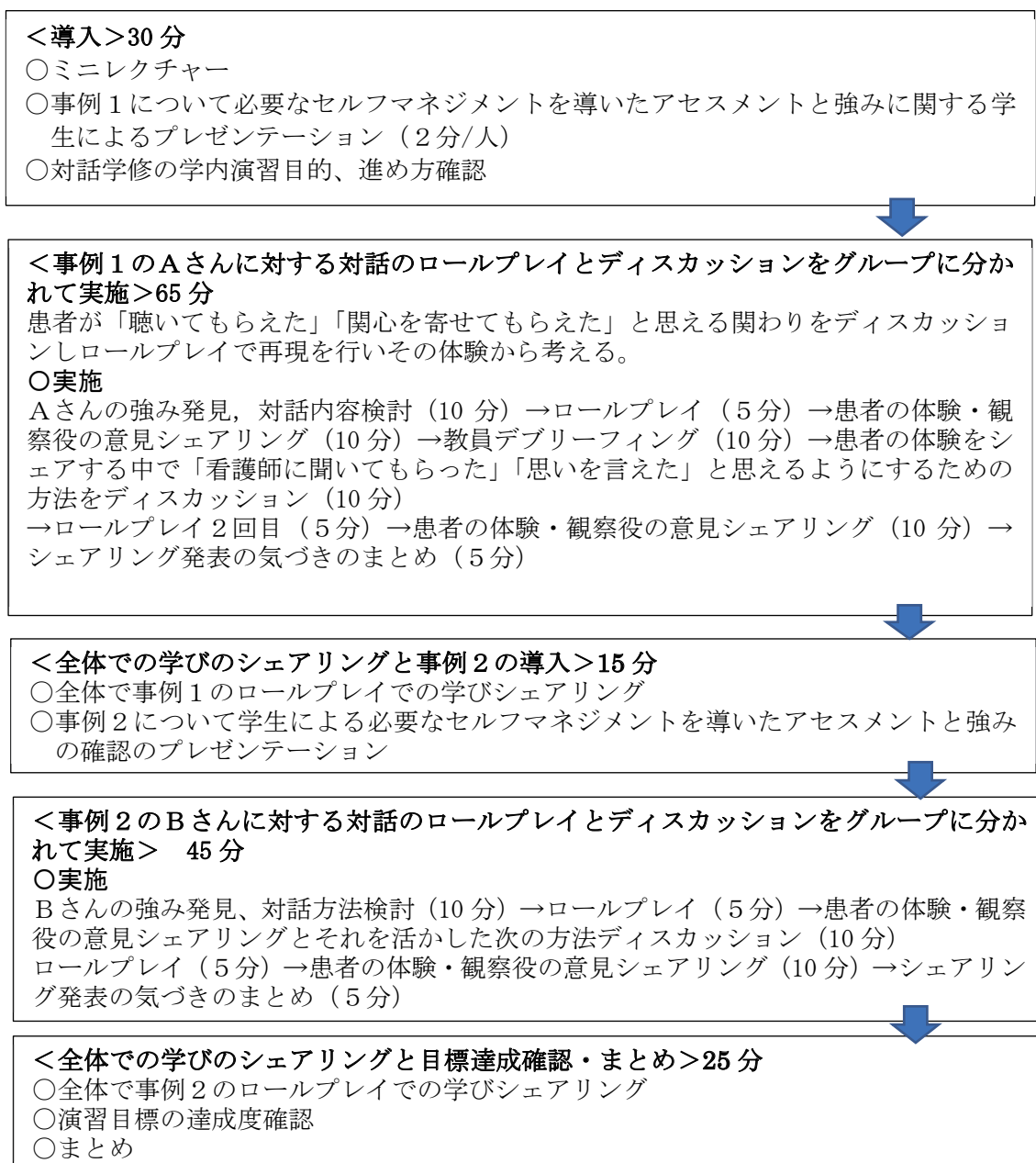


図2. 対話学修の学内実習全体の構成と流れ

VI. 効果的な対話学修を学内実習として構築するための課題

慢性疾患を有する人へのセルフマネジメント力を支援するためには看護師と患者のやり取りの中で、患者を理解しようとする関心を向けるための対話ができることが必須となる。本学内実習では、患者の病状や状況をアセスメントし、セルフマネジメントの必要性を導き、その上で、学生同士でディスカッションした中で考えた対話を看護師と患者役を決めて実

践した。そこで感じたことを共有してさらにディスカッションして得られた対話の方法を再度実施し、その後、別事例で患者の症状を確認しながら同様な流れで実施することを展開した。A大学慢性看護学実習では学生同士でディスカッションする機会を多く取り入れ、他学生から学ぶこと、さまざまな意見を聴くことで視野が広がり思考が深くなることを体験しているため、活発なディスカッションができた。

ディスカッションからは、看護師と患者の

やり取りの中で、対話によって生じる患者の体験に気づくことができた。高橋ら (2016) の報告では、本学内実習と同様に事例に基づき看護学生役・患者役を決定し糖尿病を有する患者への教育的支援の演習を行ったところ、「看護学生の態度や言葉がけで頑張ろうという思いが生じることや、逆にやる気や自信を失うという気づきをしていた」と報告している。学修する内容に着目し、事例に沿った役割を決定し実践する本学内実習の方法は効果があったと考える。

今後の課題としては、学生からの感想で述べたようにディスカッションの時間配分の検討である。時間配分や、学生人数により直接的経験の機会が限定されると臨場感をもって演習に参加できないことが報告されている (佐久間、鶴田、榎原 他, 2017)。また阿部 (2018) もディスカッションは集中力を考慮し 30 分までと示している。本学内実習は 175 分使用している。本学内実習をより効果的に行うためには、学びの効果や、学生が飽きずに学内実習に参加できる事例数、またテンポよく本学内実習を進めるためにディスカッション時間を延ばす方が良いのかなど、本学内実習全体の構成を今後検討する必要があると考えている。

謝辞

本学内実習での気づきや感想を述べてくださいました A 大学看護学部の学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 阿部幸恵 (2018) : 臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育 第 5 版, p.61, 医学書院, 東京.
- 松繁卓哉 (2017) : セルフケア / セルフマネジメントの支援をめぐる今日的課題, 日本保健医療行動科学会雑誌, 32 (2), 15-19.
- 文部科学省・厚生労働省 (2020) : 新型コロ

ナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について,

https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (検索日: 2020 年 6 月 15 日).

佐久間佐織, 鶴田恵子, 榎原理恵 他 (2017) : 臨地実習を修了した看護学生に対するシミュレーション教育の効果, 聖隷クリストファー大学紀要, 28, 29-39.

孫大輔 (2020) : 対話する医療 人々のケアにおける対話 (ダイアログ) とは, 老年看護学, 24 (2), 17-23.

高橋奈津子, 高田幸江, 松本文奈 (2016) : 成人看護学 (慢性期実践方法) におけるシミュレーション教育の取り組み, 聖路加国際大学紀要, 2, 68-71.